

IV-338

城と城下町における水辺空間との関わり合いに関する研究

日本大学大学院 学生会員 吉田 充

日本大学理工学部 正会員 新谷洋二

1. はじめに

城と城下町の建設から経営にあたって、河川の水害に悩み、土木技術によって対応してきた様子は、従来河川工学・水文学の中で都市との関係について部分的に見られる。また、都市計画の面からは、各地の個々の調査報告の中で散在している。

本研究は、城に対する洪水の歴史や対策を、河川流域と城と城下町との関わりの点から研究してみることにより意義があると思われる。今回は、千曲川水系の松代城をケーススタディとして取り上げ、城の選地と、城と城下町の洪水対策をいかにやってきたかを考察した。

2. 研究の方法

本研究方法に関しては、城郭史・市史・河川史等を参考にして、城の選地に関する歴史的背景と地理的条件を把握する。洪水の被害により文献が残っている箇所は参照し、河道の付け替え等を行った箇所は、洪水対策を当時の土木技術を駆使して、いかに対処して災害を避けてきたかを研究した。また、地形図などを時代ごとに比較してみることによって、水辺空間、特に河道変遷を追った。

3. 研究結果

わが国において、中世後半から近世初めにかけて土木技術が飛躍的に発達した。よって、城を要害堅固な山岳地帯から丘や平地に築くようになった。また、新たに政治経済上の必要性より家臣団及び商工業者を城下に住ませるための城下町建設が全国規模で盛んであった。中世・近世における城の位置選定は河川とのつながりに関して以下の要素を重要視していたと思われる。

- ① 軍事的要害の地 ② 河流による水運等
- ③ 飲料等としての利用 ④ 都市の衛生保持
- ⑤ 農・工・商業等経済的機能

加えて、洪水等の被害により河道の付け替えが行われた。これらにより土木工事前後で城と城下町の形態変遷が如実に現れている松代城を取り上げたい。

4. 松代城におけるケーススタディ

1) 松代城概要 <所在地> 長野県長野市松代町

松代城は海津城とも呼ばれ武田信玄が上杉謙信の侵入に備え、北信濃経路の前線基地としてかなり急いで築いたもので、川中島の合戦において重要な城であった。武田氏滅亡後、田丸氏・森氏・須田氏を経て、真田氏が十万石で上田より入封する。

城の立地は、北に千曲川の本流、西に笹崎・妻女山、東に金井山・関崎の尾根が突出して千曲川に迫り、東南西の三方を山に囲まれた要害の地で、その縄張りは千曲川を背にした本丸、その外周東南西に二の丸を巡らし、更に外側に三の丸を設ける形で各郭の外に土塁・石垣と水濠をまわし、南と東に丸馬出をおき城下町を含めてその外側に総構えを設け、川の水を水濠に引いて松代町を囲い込む10万平方尺以上の当時としては壮大なものだったようである（図1参照）。現在残る本丸石垣の野面積工法からして慶長期（1596～）以前の古式と見られるが、二の丸・三の丸の石垣が現存しない今では築城年代を確定することは難しい。

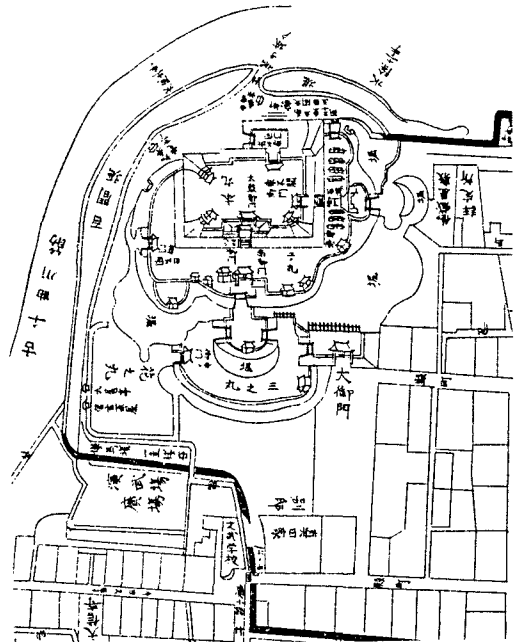


図1 松代城絵図（慶城時）

2) 松代城の地形 松代城（海津城）は、長野県長野市松代町の北郊外に現在本丸跡石垣を残している。

城とその周辺の地形は、千曲川沖積低地は、自然低地や旧河道の微高地と、旧河道や後背湿地などの微低地から構成されている。千曲川東岸の北から規模の大きい自然堤防が発達しているが、これらの低湿地内には千曲川の旧河道跡と思われる地形も残っている。図2は大正元年測量の5万分の1『長野』図幅の古地形図をもとに、旧千曲川の河道を推定したものである。いわゆる“信玄堤”で築かれており、かつての洪水時にはこれらの間から流水して冠水したものと思われる。図3は地形分類図を城の中心部のみ南から北への断面図である。この図面より、城は標高差のないほぼ平面上に位置していて洪水になると城外から本丸まで相次いで被害が及んだことが見て取れる。

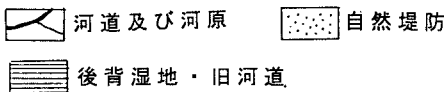
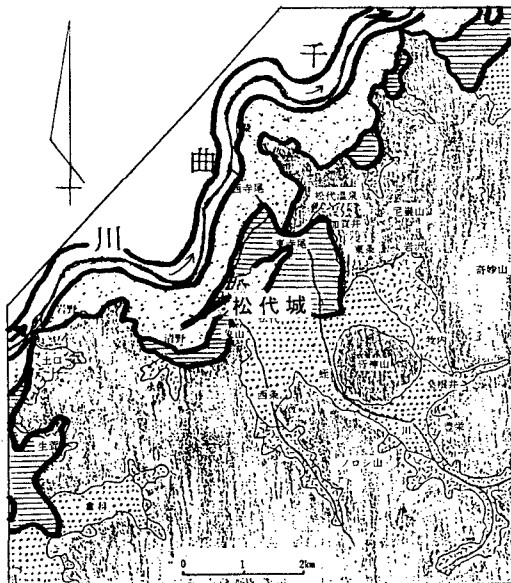


図2 松代城付近地形分類図

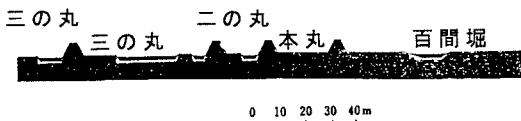


図3 松代城本丸付近断面図

3) 松代城の水害 江戸時代になり太平の世が続くと、天然の要害である城のすぐ北を流れる千曲川、城の東南の外堀に注ぐ川の流れは、しばしば水害の原因となった。特に寛保2年(1742)8月1日の水害は、城と城下町におびただしい被害を与えた。この水害は後々「寛保戊の大満水」と語り継がれ、千曲川流域をおそった記録破りのものだった。城の被害は、石垣は孕みだし、塀数ヶ所大破、本丸・二の丸はいずれも床上1尺以上も泥土が押し込み、堀はことごとく埋まり、畳建具はもとより御城米5百石(約75t)城附武具等も濁水に浸されて役立たぬものとなった。この災害により宝暦年間初め(1751~)千曲川を本丸より北へ約7百尺現在地に流れを移した。それより十数年経た明和2年(1765)またも洪水で石垣が崩れ、城に大被害を与えたので明和4年藩主居館を本丸より花の丸に移した。

4) 松代城考察 築城以来軍事最優先で度重なる水害にも耐えてきた城も、記録破りの寛保の大洪水をきっかけに、太平の世にあっては難攻不落の縄張りも改められ、千曲川の改修や藩主居館の移築などで水難は軽くなったが、これによって要害第一の城の機能は失われてしまった。地形を巧みに利用した難攻不落の城といわれ、一度も銃弾を受けなかった城も水害に相次いでおそわれ、そのたびに城の旧状に復することができずして、廃藩置県となり、廃城の運命となった。

4. まとめ

城と城下町の建設から形成の過程において、河川をどのように取り扱ってきたか、また時代とともに当初の城と城下町における河川の意義がどのように変わってきたかを検討した。積極的に土木工事を起こして城や城下町を水害から守り、城下町の発展の基盤を作った事例が読みとることが出来た。これらより、河川に対して水害に悩まされた結果、建設当初の防備を重視した考えが、時代の経過と共に経済・安全を重視する考えへと変化してきた様子がうかがえる。今後の課題は、城下町付近の河道付け替えに対して、時代背景・水運・町の発展状況等から検討してみたい。

<参考文献>

- 新谷洋二：日本の城と城下町，同成社，1991
- 太平喜間多編纂：松代町史，臨川書店，1986
- 長野市立博物館編：千曲川，長野市立博物館，1991